

都留文科大学報

Vol.158
July. 2025

つるフィールド・ミュージアム供用開始

都留文科大学入学式／70周年記念事業／新教員紹介／学外研究報告／就職状況報告
学生による授業アンケートの結果から／入試状況報告／文大だより／ぶんだい堂



都留文科大学入学式

— 今年の入学者は851名

学 長 祝 辞



都留文科大学学長
加藤 敦子

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。都留文科大学の教員・職員を代表して、みなさんのご入学を心よりお祝い申し上げます。また、ご家族の皆様にも心よりお慶びを申し上げます。

今年も、日本全国から、さらには海外からも、学部・大学院合わせて850名を超える新入生をこの都留の地に迎えることができました。皆さんは、今、これからの大学生活、キャンパスでの講義やゼミ、仲間たちとの部活やサークル活動に大きな期待を寄せていることでしょう。海外への留学や語学研修を計画している人もいるかもしれません。今日入学したみなさんが、都留文科大学で充実した学生生活を送ることができるように、教職員一同、全力でみなさんを支援していきます。

本学、都留文科大学は、1953年に設立された山梨県立臨時教員養成所から始まりました。第二次世界大戦後の、特に地方での深刻な教員不足に対応するため設立された、臨時の教員養成所でした。1955年、教員養成所が都留市立の短期大学となり、さらに4年制の都留文科大学へと発展し、現在に至ります。本学がそのルーツから、教員養成という日本の将来を担う子どもたちを育てるための人材育成を目的としていたこと、また、都留市の市立大学として創設されたこと、この2点は今も都留文科大学の根幹です。今日から都留文科大学の学生となったみなさんにも、ぜひこのことを覚えておいてほしいと思っています。

そして、2025年の今年、都留文科大学は、短期大学創立から数えて70周年を迎えました。みなさんは、大学70周年の記念の年に入学した特別な学年であることも、ぜひ心に留めておいてください。

さて、今日はここでみなさんに、都留文科大学で何を学んでほしいか、どう学んでほしいかをお話したいと思います。

昨年4月、本学では新しいカリキュラムをスタートさせました。カリキュラムとは、みなさんがこの大学で、学びの目標を達成するために何をどのように学ぶかを定めた総合的な計画です。このカリキュラムでは、みなさんが所属する各学科の専門分野を効果的、かつ、体

系的・段階的に学ぶことができるようになっています。一方で、副専攻プログラムを設置し、みなさんが自分の興味関心に応じて、また、将来のキャリアを見据えて、学科の枠をこえて幅広く実践的に学ぶコースも用意しています。そして、本学のすべての学科が、カリキュラムのゴールに、卒業のための必修科目「卒業論文」を掲げています。

学びは大きく分ければ「インプット」と「アウトプット」から成り立っています。講義や文献調査、フィールドワークなどを通して知識やスキルを獲得するのがインプット、ゼミでの発表やレポート・卒業論文の執筆がアウトプットと言えるでしょう。インプットがなければアウトプットはできませんし、アウトプットがなければインプットを役立てることはできません。みなさんは、4年間の学びを通して、このインプットとアウトプットの能力を体系的・段階的にバランスよく身につけ、その集大成としての「卒業論文」を執筆することが求められています。

しかし、現代では、ネット検索で必要な時に必要なインプットが可能ですし、生成系AIを利用すればそれなりのアウトプットができるため、「卒業論文も楽勝でしょ」と考える人もいるかもしれません。

そこで、2か月ほど前に一部の大学関係者で注目された、ある大学のある先生のSNS、Xへの投稿を紹介しましょう。それは、その先生の担当する法律関連の科目の学期末レポートについての投稿でした。与えられた課題に対して裁判の過去の判例を踏まえながら自分の意見を述べるというテーマのレポートだったようですが、学生が提出したレポートのいくつかで、レポート内で取り上げている判例の存在が確認できない、という内容でした。その先生は大変すぐれた研究者で、学問に対して誠実で謙虚な姿勢をお持ちの方で、判例の存在が確認できないのは自分が十分に探し出せていない可能性があるのでは、該当するレポートを提出した学生にメールを送りました。レポートで取り上げた判例がどの判例集、どのサイトにあるのか教えて下さい、と続けて投稿していました。Xに投稿したのは、メールに気づかない学生のために、複数の連絡手段を取ったものでしょう。

この投稿内容からすぐに想像されるのは、自分で判例を調べることをせずに、生成系 AI に頼ってレポートを書いた学生たちがいたのだろう、ということです。そして、この投稿は、いろいろなことを教えてくれます。

第一に、生成系 AI は嘘をつくことがあり、存在しない文献や情報を実在するかのように提示してくることがあります。これを見破るには、人間の側に一定水準の知識や知見が必要です。

第二に、自分自身で調査して確認したインプット、自分の頭を使って思考したアウトプットでなければ、自分の学びにはなりません。現代社会においてネット検索や生成系 AI を使いこなすスキルは必要ですが、それによって得られた情報や成果物を自分の頭で検証する過程を経ることがさらに必要です。自分の頭で判断してはじめて、有効なインプット・アウトプットになるということです。

第三に、判例の存在が確認できないのは学生が生成系 AI に頼ってレポートを書いたからであろうと推測しても、その推測が 99% 当たっていると思われる場合でも、残りの 1%、自分が当該の判例を見つけられずにいるのかもしれない、と自分の能力を疑ってみる、生成系 AI だという自分の判断を客観的・批判的に検討することの重要性です。それこそが学問をするということであり、学問に対する誠実さです。

卒業論文の話に戻しましょう。卒業論文を書くというのは、自分自身で設定した課題に対して、調査や検証を重ね、根拠を示しながら自分の主張を書き記すという作業です。卒業論文のためには、外国語や古語といった言語を修得したり、一次資料となる文献を読み解く力や調査の方法、集めたデータを分析する力を身につけることが必要になります。時間や労力をかけて、それらの能力を自分で獲得していかななくてはなりません。そして、文章を書くということは、思考することです。人は頭の中で言葉を使って考えています。しかし、それをそのまま文字にしても、多くの場合、文章にはなりません。

頭の中の考えを、適切な語句や表現を選び、説得力のある論理構成を立てて文章化する努力を通して、自分の思考が鍛えられます。文章化の過程で、自分自身で集めた知識や情報の正確性が検証され、自分の偏見や先入観を排した、誠実で論理的な思考が組み立てられていくのです。

卒業論文の執筆は、4年間の学びの集大成であり、課題発見力、情報収集力、分析力、論理的思考力を鍛え上げます。それは、みなさんが、急激に変化する社会、予測不可能な時代を生き抜く力となり、よりよい未来をつくるための哲学となります。文科大学で人文学を学ぶ意義はそこにあります。

都留文科大学にはみなさんを成長させるすぐれたカリキュラムがあります。知識の宝庫である立派な図書館があります。「都留ヒューマニティーズセンター (THMC)」では、ICT 教育、DX (デジタルトランスフォーメーション) 教育を推進し、文系理系の枠を越えた学びを実践しています。また、今月 29 日には、大学 70 周年記念として「つるフィールド・ミュージアム」がオープンし、地域と連携した実践的な学びの場が増えます。さらに言えば、皆さんの学びの場は校舎や大学キャンパスの敷地にとどまりません。この都留の地全体がみなさんの大学であり、学びの場です。この学びの場を活用して、自分自身で、自分の頭を使って、最大限のインプット・アウトプットをしていきましょう。

本学の学訓は「菁莪育才 (せいがかいくさい)」です。これは中国の四書五経の一つである『詩経』の言葉によるものです。「せいがか」は青々と茂るつものよもぎ、「育才」はすぐれた人物の育成を楽しむことを意味し、「つものよもぎが勢いよく成長するように学生が成長して欲しい」との願いが込められています。都留文科大学はみなさんが勢いよく成長するための場です。

みなさんの本学での学びが、豊かなものとなることを心から願っています。





4月4日(金)、都の杜うぐいすホールにおいて、令和7年度都留文科大学入学式を開催いたしました。

式典は2部制で実施され、午前10時から行われた第一部では、学校教育学科・地域社会学科・国際教育学科、午後1時30分から行われた第二部では、国文学科・英文学科・比較文化学科・大学院を対象に行われました。

入学者の内訳は、文学部：国文学科133名、英文学科133名、教養学部：学校教育学科207名、地域社会学科173名、比較文化学科138名、国際教育学科48名、大学院文学研究科19名、合わせて851名の入学が認証されました。会場の大ホールは、入学者およびその保護者でほぼ満員となりました。

会場周辺では部活動・サークルなどの新入生歓迎活動も行われるなど、活気に満ちた雰囲気での開催となりました。

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。



新入生のことば



教養学部 学校教育学科
新入生代表 清水愛実

暖かな春の陽射しに誘われて、桜もほころび始めるこの佳き日に、伝統ある都留文科大学の入学式を迎えられたことを、大変嬉しく思います。これも、母校の先生方・家族・友人たちなど、多くの方々の支えのおかげです。皆さんの思いをしっかりと心に留め、四年間の大学生活を実り多く、掛け替えのないものにすべく、日々精進したいと思います。

近年、急速なICTやSNSの発達により、コミュニケーションの方法も多様化して、幅広い交友関係が築け、それぞれが気軽に情報を発信・収集できるようになるなど、日常生活がより便利で効率的になりました。

一方で、現代社会では、人と人とのつながりが薄れているとも言われています。スマホを介した交流は確かに簡単で便利ですが、かえて人と人が直接語り合い、考えや意見を交わす機会を減らしているのかもしれない。自分の考えだけを主張しがちになり、相手を尊重する姿勢も揺らいでいるように感じられます。加えて、新型コロナウイルスによる活動制限も影響しました。リモート授業や分散登校など、寂しい学校生活を経験したからこそ、人と人とのつながりの大切さを再認識させられ、改めて



教養学部 比較文化学科
新入生代表 小林ゆい

季節は春を迎え、新たな生命が芽吹きつつあるこの佳き日に、伝統ある都留文科大学の入学式を迎えることができ、大変光栄に思います。これも母校の先生方や家族・友人たちの支え、地域の方々からの温かい眼差しがあってこそだと思います。大学での生活を、実りある素晴らしいものにすべく、切磋琢磨していきたいと思います。

あの地下鉄サリン事件から30年が経ちました。14人が犠牲となり、6300人が巻き込まれたこの事件は、いつもどおり学校や仕事に向かう人たちが被害に遭うという、日本社会を震撼させるものでした。若者の不安を煽り、間違っただ道へと引き込むやり方は、現代社会に蔓延る不安を考えると他人事ではありません。今、日本には少子高齢化や経済格差など問題が山積しています。その中で先を見通せない不安に駆られることもあるかもしれません。

一方で、現在も戦争が続くウクライナや中東では、教育

実際の会話や実体験によって人間関係を築くことの大切さを痛感しています。

同時に、ICTの発達は、戦争や貧困、災害の悲惨さなど、世界中の「今」をより身近に感じさせてくれるようにもなりました。世界人権宣言には、「すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利について平等である」と明記されています。しかし、この理念を率先して実践すべきいくつかの大国が、世界中の国々を不安の渦に巻き込んでいます。昨年、日本被団協がノーベル平和賞を受賞しましたが、私達こそ平和を築く力となり、次世代に受け継いでいかなければなりません。一日でも早く世界中の子供たちが武器ではなく、ペンとノートを持って勉強できるようになることを願っています。

私達はVUCAと呼ばれる予測困難な時代を生きていくこととなります。グローバル化が進む一方で、少子高齢化や地方の過疎化、経済格差など、数々の問題が山積しています。その中で、私達一人一人が未来の創り手となるために必要な力を身につけていかなければなりません。やがて、多くの人が教育現場に進むことと思いますが、そこで巡り会う子どもたちが新しい時代の担い手となるよう、社会に貢献していきたいと思います。

そのために、全国各地の学生が交流し、学び合うことができる恵まれた環境を生かし、意欲的に学ぶとともに、未来を見据えた高い志を抱いて、一日一日を大切に過ごしていくことを決意し、新入生のことばといたします。

の機会を奪われ、命の危険に晒されている若者が大勢います。本来であれば、学び、夢を追いかける人々が、未来を閉ざされています。日本に住む私たちは、戦後長い間平和を享受し、紛争やテロを遠い世界のことで感じてきました。しかし、戦争による犠牲者は増え続け、ニュースで目にする街の破壊や人々の悲しみは、本当は決して遠い出来事ではありません。そうした世界情勢を考えると、高度な教育を受けることができる私たちは、非常に恵まれています。

今、私たちが生きる時代は、これまでにない国際的な変動の中にあります。紛争や政治的対立、貿易摩擦など、世界中にその影響が及んでいます。だからこそ、私たちは、他の国々や文化・価値観と向き合いながら、共に解決策を見出していかなければならない時代に生きています。そこで私たちが学ぶべきことは、単に知識だけにとどまらず、他者とのつながりを大切にし、社会に貢献する力を育むことでもあります。異なる背景や意見を尊重し、対話を通じて共に解決策を見出す姿勢が、これからの時代に求められています。

そのために、都留文科大学の恵まれた環境で、教養と多角的な視点を身に付けたいと思います。そして、世界を支える力強い存在となることを目指し、大きく成長していくことを決意して、新入生の言葉といたします。



テーマは、「楽しむ」・「学ぶ」・「つながる」

本学の音楽棟の西側に位置する「つる湧水のほとり整備プロジェクト」事業地に、新校舎「つるフィールド・ミュージアム」が完成しました。

本学では創立以来、都留市というまちをフィールドに、地域の自然や人びととの交流のなかでさまざまな取組が行われてきました。それは、「専門性」とともに、地域で育まれた「知恵」を学ぶ場でもありました。地域でのこうした教育・研究活動は、本学の魅力の一つでもあり財産です。

「つるフィールド・ミュージアム」とは、まち全体を博物館（ミュージアム）に見立て、都留文科大をとりまく豊かな自然や文化といった事象に親しみ、じかに触れ、交流や学びを深めていこうとする構想です。それらを実現するために、新校舎のテーマは、「楽しむ」・「学ぶ」・「つながる」としました。

学びを支える環境

新校舎では、木質を基調としたあたたかみのある空間など、学びを支える環境を整えています。建物を

取り囲むように配置されたテラスとビオトープ（生きものが生息する空間）もそうです。このテラスは、「まちの縁側」として機能し、新校舎のテーマである「楽しむ」空間にもなります。ここでは人だけでなく生きものとの交流や賑わいを楽しむことができます。テラスには木製のルーバーがあり、季節や時間とともに移り変わる木漏れ日を楽しめるでしょう。

ビオトープには、子どもから大人まで親しめるチョウの庭や、カエルやトンボなどさまざまな生きものが訪れる水辺環境があります。テラスに接していて、本で学んだ知識を実物で確かめるなど「楽しむ」から



ミュージアム」が完成しました

「学ぶ」へとつなぐ経験ができるかもしれません。

1階にはセミナールームがあります。ここでは、演習や授業、ゼミナール、市民公開講座や40人規模の上映会などに活用できます。

建物の中央には、資料室とライブラリ（図書コーナー）を設置しました。資料室には、全国の大学に先駆けて「都留市全体を『自然博物館』にしよう」という構想を描いた本学の元学長の大田堯先生（1918-2018）や同時期に「フィールド・ミュージアム」構想を提唱された今泉吉晴先生（本学名誉教授）に関係した資料、野外へ誘う図鑑や絵本などを収めます。

この資料室とライブラリの隣には地域交流研究室があります。地域での学びや活動の成果をニュースターなどの発行物や展示として表現し発信します。

さらには誰もが活用できるよう資料室では、資料の研究やデジタル・アーカイブにも取り組みます。

重要な衣・食・住の領域

都留文科大学の「文科」が意味する「人文科学研究」において、衣・食・住は欠かすことのできない重要な領域となります。本学の地域交流研究センターが推進してきた「つるフィールド・ミュージアム」構想においても、私たちの暮らしの根幹をなす家庭科の領域が、地域の食育など大切な課題に取り組んできました。新校舎の2階には、こうした家庭科に関連した調理室、実験室、被服室などが配置されています。

最新のIH調理機器を備えた衛生的かつ安全な調理室では、栄養や食材の特性をふまえた調理操作を段階的に学び、食への理解と生活に活かす実践



力を養います。

衣・食・住にかんする複合的な生活課題を扱うのが実験室です。ここでは理論と実践を統合し、多面的な視点から暮らしを科学的に探究する力を身につけます。被服室は開放的な実習室になっており、衣服の構成や造形技術、素材の特性と扱いを探究的に学び、創造性や自己表現力にかんする課題に対応する力を育てます。

暮らしに根ざした衣・食・住から、社会・文化・科学を探究していくこのような家庭科のビジョンは、身近にある学びから教育・地域・未来に開いていく目を養うことへとつながっていくでしょう。



「新しい生きた社会の創造」に向けて

大田堯元学長は、「都留自然博物館」を「人間と自然との共存の関係を含んだひとつの新しい生きた社会の創造である」(*)と記しています。いのちある人間と人間、人間と自然がかかわり合い支え合う世界に向けて、新校舎がまさにその「拠点」となれるようにともに育んでいっていただけたら幸いです。

地域交流研究センター
北垣 憲仁



*「大田堯自撰集成 補巻 地域の中で教育を問う〈新版〉」

都留文科大学創立70周年記念事業

都留文科大学は、昭和28年4月に創設された山梨県立臨時教員養成所を起源に、令和7年度に短期大学設置から数えて、70周年の節目の年を迎えました。

これまで、本学では伝統である教員養成や強みである地域との連携を続ける中で、多様な人材を輩出してきました。急速な少子化が進む中で、本学が選ばれる大学、魅力あふれる大学となるため、この創立70周年を機に、改めて教育の質の維持向上に全学的に取り組み、本学の教育研究活動を周知するとともに、未来に向けた確固たる地位を維持していくため、各種事業を実施していきます。

モニュメントの除幕式を行いました！

都留文科大学のロゴマークは、大学創立60周年の記念事業として制作され、その後、大学のシンボルとして広く愛され続けています。3月19日（水）、大学創立70周年を迎える節目に、このロゴマークを基にした記念モニュメントが設置され、除幕式が盛大に行われました。このモニュメントは、地域とともに連携し成長し続け、新しい世代の学生たちに質の高い教育を提供し続ける決意を示しています。当日は、同窓会長をはじめ、学生自治会執行委員長や桂川祭実行委員会長などの学生も参加し、記念写真の撮影など特別な瞬間となりました。

フォトスポットなどでもぜひご活用ください。



ブランディングムービーが公開されました！

本学の色鮮やかな未来を想起させるブランディングムービーおよび大学紹介ムービーを制作し、4月2日（水）から公開を開始しました。これらのムービーは、70年の歴史を振り返りつつ、今後の学びの場としての役割を強調し、大学の魅力を広く伝える内容となっています。

各ムービーには、株式会社アミューズに所属する女優・鈴木美羽さんが出演しており、ブランディングムービーの楽曲は、同じく株式会社アミューズ所属する、山梨県出身の男女6人編成のバンド「JIJIM」が担当しています。

70周年記念特設サイトおよび本学の公式SNSで公開中です。ぜひご覧ください。

ホームカミングデーを実施しました！

4月20日（日）にホームカミングデーを行いました。

当日は卒業生をはじめ、現職教員や恩師の先生方など、計120名にご参加いただきました。イベントでは、30年以上前に制作された貴重な動画や、大学の70周年を記念して制作されたブランディングムービー、さらに現在の大学紹介動画を視聴していただいたほか、学校教育学科の邊見信先生による講演「『メディア』という妙薬と劇薬!?～子どもとメディアの歴史から～」が行われ、参加者は非常に興味深く聴講していました。また、学生の案内によるキャンパスツアーも行われ、改修工事を控える1号館や、THMC（6号館）を含む様々な施設が紹介されました。参加者は懐かしいキャンパスを巡り、思い出を胸にその時を楽しんでいました。

その後の親睦会では、乾杯後、参加者同士が再会を喜び合い、和やかな雰囲気の中で歓談を楽しみました。旧友や教員との交流が深まり、みなさんにとって貴重なひとときとなったことと思います。

イベント終了後にご協力いただいたアンケートでは、「懐かしい学内を見学でき、旧友とも久しぶりに会えてとても貴重な機会でした。」や「卒業を改めて誇りに思い、後輩たちに心からエールを送ります。」といった温かいお言葉をいただきました。

参加された皆様、誠にありがとうございました。



つるフィールド・ミュージアム落成式が執り行われました！

4月29日（火）、地域の自然や人との出会いを楽しみ、生き物や人との交流を通して学びを深め、新たな人間関係を創造する拠点「つるフィールド・ミュージアム」の落成式が執り行われました。

「つるフィールド・ミュージアム」は、自然に囲まれた環境に位置するだけでなく、施設内の設計にも細かな配慮が施されています。建物を取り囲むように配置されたテラスは「まちの縁側」として地域住民や訪問者が交流できる場となり、木質を基調とした温かみのある室内は、学びの場として心地よく落ち着いた雰囲気を出しています。施設内には、地域交流研究センター、調理室、被服室、実験室、交流スペースなどがあり、地域住民とともに学び合い、創造的な活動を行うための豊かな環境が整えられています。

実施設計を担当したのは、牧野富太郎記念館や東京メトロ渋谷駅などを手掛けた内藤廣建築設計事務所です。昨年5月に工事が始まり、長い準備期間を経てついに完成を迎えました。

落成式には多くの来賓者が集まり、施設のコンセプトについての説明やテープカットなどが行われました。この新たな施設が地域活性化の一助となり、多くの人々に愛され、学びの場として活用されることが期待されています。



こどもまんなかほとりフェスタに出展！

つるフィールド・ミュージアム落成式と同日に開催された「こどもまんなかほとりフェスタ」では、VR体験イベントを実施しました。「つるビーパーク・いこっと」の開園もあり、多くの方々にご参加いただき、賑やかな企画となりました。



記念寄附金の募集について

70周年を迎えた都留文科大学は、これまでの歴史の中で、本学の教育振興に寄せる先輩諸氏・同窓生の母校愛、地域の方々の地元愛に支えられながら、輝かしい歴史と伝統を築き上げ、今日まで発展してまいりました。本学のさらなる飛躍と発展、次代を担う学生の育成のため、皆様方のご支援・ご協力をお願いいたします。



ネット申込・決済 ※F-REGI (エフレジ)
右側のQRコードよりお申し込みください。



【ご利用可能な決済方法】

- ・クレジットカード（上限金額なし）
- ・コンビニエンスストア（5万円未満）
- ・Pay-easy（上限金額なし）

※決済手数料は無料です。また、「寄附申込書」は不要です。



寄附金特設サイトからアクセス



郵便振替

郵便局(ゆうちょ銀行)窓口・ATMによる払込みは、「払込取扱票」が必要となります。ご希望の方は、右側のQRコードからご請求いただくか、下記までお問い合わせください。

※振込手数料は無料です。また、「寄附申込書」は不要です。



「払込取扱票」の請求はこちらから



銀行振込

銀行からのお振込みは、「寄附申込フォーム」に必要事項を記入したあと、下記の口座にお振込みをお願いします。「寄附申込フォーム」は右側のQRコードからご記入いただけます。「寄附申込フォーム」への回答が難しい場合には、下記までお問い合わせください。

金融機関・支店名	種別	口座番号	口座名義
山梨中央銀行都留支店	普通	1009150	公立大学法人都留文科大学
ゆうちょ銀行 029 支店	当座	0118109	都留文科大学 寄附金口

※振込手数料はご負担ください。



「寄附申込フォーム」はこちらから



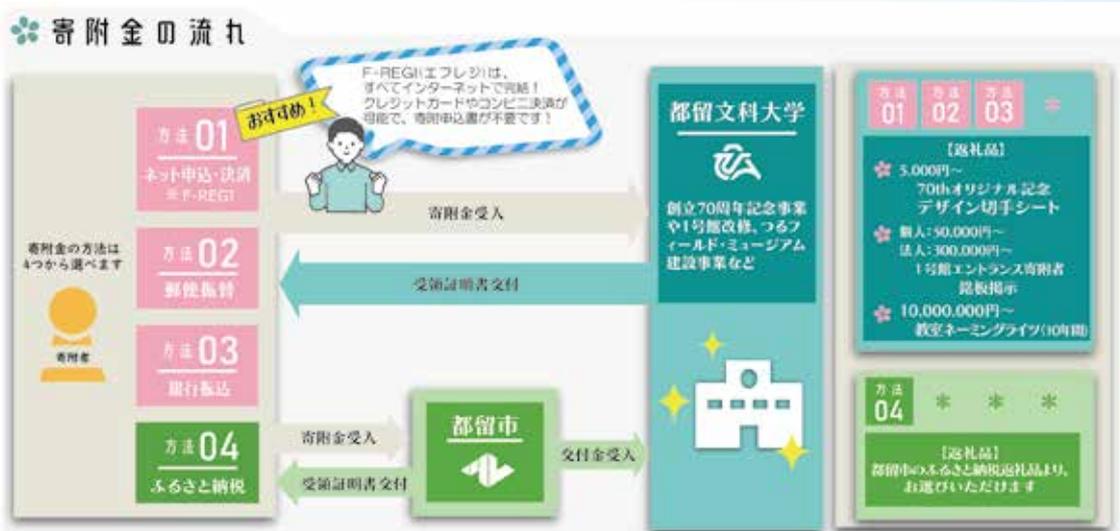
都留市ふるさと納税特設サイト「TSURUSELECT」によるご寄附

右側のQRコードからお申し込みください。

※都留市にお住まいの方は、制度上、都留市からのふるさと納税返礼品のお受け取りができません。上記の方法01～03をお選びください。



都留市ふるさと納税特設サイトはこちらから



本寄附金に関するお問い合わせ先
都留文科大学創立70周年記念事業期成会事務局 公立大学法人都留文科大学 総務課
〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1 電話 0554-43-4341 (代表)



新教員紹介

文大に着任するにあたって



着任のご挨拶

国文学科 講師
阿部 真也

2025年4月付で文学部国文学科に着任した阿部真也と申します。昨年度まで東京大学の国文学研究室で助教を務め、この度、都留文科大学で研究・教育に従事する機会をいただきました。70周年の大きな節目の年に専任教員を拝命することになり、身の引き締まる思いです。

専門は近代文学で、特に江戸川乱歩や夢野久作が活躍した探偵小説ジャンルについて考えております。中でも私はややマイナーな探偵小説家・久生十蘭を主軸に据え、ジャンルの成立と変遷を時代・社会状況との関わりから研究してきました。周辺的な作家であるが故に十蘭からはジャンルの抱える多くの課題が見えてきます。探偵小説を単なる娯楽として読むのではなく、ジャンルが時代状況に対して持っていた社会批評的な可能性を明らかにす

ることを目指しております。今後は松本清張を始めとする社会派推理小説にも研究を広げたいと考えています。

私は中学校・高等学校の現場で国語を教えていた経歴もあります。教員養成の歴史を持つ本学は私の知識や経験を生かせる格好の場と思っております。70年の伝統を守り、そして次世代へ受け継いでいく大学の一員として認められるよう、精進していく所存です。何卒よろしくお願い申し上げます。



江戸川乱歩『二銭銅貨』（「新青年」大12・4増大）。探偵小説といえば「翻訳」が当たり前であった当時に、「創作」探偵小説と銘打って掲載される。以後、日本の創作短篇探偵小説が一挙に花開く。



着任のあいさつ

国文学科 講師
軽部 利恵

今年度4月に着任しました、軽部利恵です。文学部国文学科には時代や地域を越えた幅広い学びの蓄積がありますが、そのうち国語学(古代語)ゼミを担当します。

授業では、日本語の歴史を語るうえで欠くことができない文書を講読したり、学生と議論しながらテキストを読み進めたり、日本に文字が登場した当初からのコミュニケーションのあり方を見きわめるなど、現代にまで読み継がれた文献資料と向き合い、そこに残されたことばを観察・記述・分析するというを行っています。どの授業でも、数理ではあらわすことができないような、ことばの世界の面白さ、その興味深さを伝えられるよう、心がけています。

都留文科大学の学生は、卒業後、教職をはじめとしてさまざまな進路へと歩まれますが、文字やことばを使ったコミュニケーションはいずれの進路においても欠かせないものです。昔の人々が文字やことばを使ってどのように読み書きを行い、それによってどのような意味がもたらされたのかについて理解を深めることは、私たちが日頃行うコミュニケーションがどのような意味を担っているのか、見つめ直すきっかけになると思っています。

今後とも、学生のみなさんが、よりよい人生を歩めるように、研究・教育に専念したいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



学会発表の様子



「着任に寄せて」

国文学科 准教授
脇田 裕正

今年度から文学部国文学科の「日本文化」を担当することになった脇田裕正と申します。比較文学の視点から近代日本文学が欧米文学から受けた影響について研究してきました。

現在の私の主な研究テーマは、詩人・批評家・編集者として知られる春山行夫の戦後の活動を検証していくことです。春山は海外文学を紹介するだけでなく、映画批評や紅茶や宝石の歴史といった雑学的なエッセイを書いています。さらにラジオのコメンテーターとしても活躍しました。このようなジャンル横断的な春山の活動は「日本文化」とは何かを考えるヒントになります。

ゼミを始めとした授業では、春山のような様々なジャンルを移動し続ける者に焦点を当て、「日本文化」の

多様性とそのダイナミズムの様相を色々と紹介していきます。授業では、「日本文化」は、世界の様々な文化との相互交流のなかでその輪郭が見えてくることに焦点を当てていきます。「日本文化」を学ぶことは、グローバル化する現代社会の喫緊の諸問題を考えることに繋がっていくことを、授業のなかで学生の皆さんは実感していくことができると思います。

新任として私も学生のみなさんと同様に学びの途上にあります。どうぞよろしくお願いいたします。



近代日本のモダニズム文学を代表する詩誌『詩と詩論』



紛争後の平和構築

比較文化学科 講師
片山 夏紀

Muraho ?(ムラホ) アフリカのルワンダ語の挨拶です。私は1994年にルワンダで起こったジェノサイド(集団殺害)を研究しています。同じ村に暮らす被害者と加害者がどのように関わり合って暮らし、ジェノサイドの賠償に取り組んでいるのかを明らかにしてきました。複数の村に住み込み被害者と加害者に直接聞き取り調査を行い、首都キガリ市の警察署本部に保管されている裁判記録と照合する研究手法をとっています。

これまでの研究は新著『ルワンダのガチャチャ裁判：ジェノサイドの被害者と加害者の賠償をめぐる対話』にまとめました。この学報の裏表紙「ぶんだい堂」で紹介されています。

担当する授業は「戦争・平和論」や「現代世界とジェ

ノサイド」などです。アフリカ地域や現在起こっている紛争終結後の社会において、人々が和解や賠償問題にどのように取り組むのかをみます。

最後に、私は山を眺めるのが好きで、山に囲まれたこの大学を気に入っています。鳥のさえずりや湿った土の匂いがルワンダの調査地の村と似ています。3月に都留アルプスハイキングに参加し、西願寺のしだれ桜を眺め、黄色く丸っこいミツマタの群生地を通り3時間かけて山中を歩き、芭蕉ゆかりの田原の滝に下りてきました。このような自然豊かな地で皆さんと学べることを嬉しく思います。



クリスマスの礼拝で叩く太鼓の牛皮を火で乾かす
(2015年12月24日、ルワンダ調査地にて筆者撮影)



地域とともにある 社会科をめざして

学校教育学科 准教授
小川 輝光

教養学部学校教育学科に社会科教育学担当として着任しました、小川輝光と申します。これまで20年間中学校の教育現場で社会科を教えてきました。その一方で、歴史教育を中心とした研究活動もおこなってきました。

最も長く取り組んでいるテーマが、高度成長期に起きた公害である水俣病をいかに学ぶかということです。社会科の教科書では必ず出てくるできごとですが、過去のできごとのように感じます。しかし、現在も被害の全貌がわからず、患者さんの生活もあります。終わらない現在の水俣病と、学校で学ぶ歴史としての水俣病を、いかにつないで学ぶことができるか検討し、授業や教材をつくってきました。

このような地域のなかの歴史を教材にすることで、普遍的な問題を考え、私とは異なる他者と出会える学びを目指しています。私が生活の拠点を置いている神奈川には世界とつながるさまざまな文化や歴史があります。都留市にも、これまで約15年訪れていますが、まだまだ知らないことがたくさんあります。学生のみならずとともに、地域に教材を探し、地域の魅力を発見したいと思っています。

とりわけ、今年は戦後80年です。薄れゆく戦争の記憶を継承するとともに、現在だからできる学びの実現を目指したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



水俣市茂道の漁港を出港する船



着任のごあいさつ

学校教育学科 准教授
小田 郁予

学校教育学科に着任いたしました小田郁予と申します。どうぞよろしくお願いいたします。専門は教育学で、「学校」という場の日常を描くエスノグラフィという研究をしています。学校へフィールドワークに出かけて、終日、現場で子どもたちや先生方と生活を共にしながら、「学校」という場で、どうその日常が維持されているのか、そこで生きる人々の生活を描く研究をしています。

いま「学校」、というトネガティブなことを様々耳にしますが、私の研究では、エスノグラフィの記述を通して、学校という場で生きる多様な立場の多様な人たちが、日々の難しさをどう語り、目の前にあるものの複雑さと共にどうあるのか、当事者にとっての「意味」を探りながら未来の可能性を探究しています。フィールド

に身を浸し、そこに生きる人々の日々の営みを観察して、色々な語りに耳を傾け、現場の難しさを解きほぐしていく研究をしています。

学生のみなさんと共に学問を通して見識を広げながら、同時に対象に根を下ろし、現場から問いを立ち上げ探究を続けていけたらと思います。現場に生きる人にとっての意味、当事者にとっての価値を考えながら、「学校」という場で生きる人々の生きづらさを解きほぐしていく学びをみなさんと共にしていけたらと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



先生方や子どもたちとの生活の様々な場面を綴ったフィールドダイアリーと、先生方の語りを聴いてきたICレコーダー。



ごあいさつ

学校教育学科 講師
佐藤 みのり

私の専門は発達精神病理学で、私の学術的関心は「小児期の逆境体験と保護的・補償的体験は、発達や精神的健康にいかに関与するか」という点にあります。貧困や虐待、自身や家族メンバーの障害や疾患、大人から無条件に愛されること、仲間から受け入れられることなどは、その人の人生の歩みにさまざまに影響することが、これまでに明らかにされています。私は、この文脈において、ヤングケアラーと大学生ケアラーについての研究を継続しています。家族のケアを担う子どもと若者が、その体験をめぐって心理・社会的な不適応を発現してしまうことを防ぐにはいかなる支援が必要かを、日々検討しているところです。

私は、都留文科大学の学生と向き合うなかで、「誰

かに貢献するために学びたい」という方の多さを実感しています。教員として、文化の継承を通じて、新たなシステムの創成によって、グローバルな活動でもって…と、それぞれの学生が実に多様なかたちで、やがて誰かの生活に寄与することを目指して取り組んでいることを知りました。このような学生の真摯な夢を応援できるよう、私自身も邁進いたします。

ところで、私の祖父は、長く都留市で山野草を研究しておりました。キャンパスのあちこちで出合う山野草に祖父の思い出を重ねつつ、奉職の喜びをかみしめています。



山梨県における基調講演



着任のご挨拶

学校教育学科 講師
関子 あまね

学校教育学科、体育系新任教員の関子あまねです。聞きなれない名前かと思いますが「ズシ」と読みます。今年度から都留文科大学で働けることを大変うれしく思います。

私の専門分野はスポーツ科学で、特にアスリートの筋力・パワー発揮能力のトレーニングやコーチングに関する研究に取り組んでいます。着任前は東京都北区にある国立スポーツ科学センターでトップアスリートの競技力向上に関わる研究をしていました。近年、大谷選手の活躍もあり、スポーツの話題が耳に入らない日は少ない時代になりました。さらに今年は世界陸上が東京で開かれるなど日ごろスポーツをしない人でもテレビなどでスポーツを通して世界の文化などに触れる機会が増えるのではないのでしょうか。そんなアスリート達の

トレーニングは想像よりもはるかに複雑に計画されており、様々な能力をその時に合わせて絶妙なバランスで向上させる必要があります。このように、華々しく活躍している舞台の裏でその何倍もの時間をかけた緻密なトレーニングを重ねていることにも興味を持ちながら観戦してはいかがでしょうか。

主に「体育実技演習」や「陸上競技」などを担当します。教員として必要な体育授業のスキルに加えて、問題解決型の思考で臨機応変に対応できる能力も伝えていけると良いなと思っております。



2021年に科学委員のデータ撮影に行った陸上競技場の様子。早朝からの活動だったのでまだ競技場内にはほとんど誰もいません。



着任のご挨拶

一この「縁」に感謝して

学校教育学科 講師
中村 仁

2025年4月より、教養学部学校教育学科に着任いたしました中村仁と申します。前任校の活水女子大学（長崎県）では、3年間にわたり音楽教育の指導と研究に従事してまいりました。海の見える街から、山あいの学び舎へ。自然環境の移ろいととも、教育と研究の両面で新たな挑戦が始まることを、大きな喜びとともに受け止めております。

私の専門は音楽教育学および声楽実践、特にドイツリートにおける歌唱表現とその指導法を主な研究テーマとしています。リサイタル活動を通じた表現研究と並行して、「音楽科におけるミュージッキングの実践」や「中山第一の音楽教育実践と音楽教育観」といった教育学的視点からの研究にも取り組んでいます。

本学では「音楽科指導法 A～D」や「歌唱」等の講義・実技を担当し、音楽教育における教科内容の再構築とその教育的意義について、学生の皆さんと共に思索を深めてまいります。また光栄にも、60年以上の歴史と伝統をもつ都留文科大学合唱団の顧問・常任指揮者を拝命いたしました。多くの先達のご尽力によって育まれてきた温かく力強い団の一員として、芸術活動と教育実践との往還を意識しつつ、学生主体の創造的な活動を支えていく所存です。

今後ともご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



中村仁テノールリサイタルの様子



つるの魅力を
全部発信します

地域交流研究センター 特任講師
原田 真喜子

地域交流研究センターに着任しました原田真喜子です。専門は情報デザインとデジタルアーカイブ(貴重な資料をデジタルデータとして保存・利活用促進・未来に継承すること)です。

地域交流研究センターでは「真正なるデジタルアーカイブ」と「魅せるデジタルアーカイブ」の構築をします。前者は都留市の自然・文化資源に加えて大田堯元学長の教育資料 DA 化を中心に貴重な資料に世界中の人がアクセスできるような環境を構築します。後者は、「実際に都留に来たい」と思ってもらえるような情報発信をデザイン・実装します。

着任してまだ数日(執筆時点)ではありますが、早速植物のデータベースを作成するために、AI(深層学

習)を用いて写真から学名を判定したり、先生・学生が持つ資料をデジタル地球儀にマッピングするシステムの開発などを行っています。

今後は新棟「つるフィールド・ミュージアム」にて地域とつながる学びと交流の場のデザインにも携わります。周辺のビオトープの生育の様子を3D スキャン、ジオラマ作成など、デジタルと実世界をつなぐ展示にも関心があります。

私の研究は、都留文科大学周辺の人・自然・文化・学生・そして先生方のこれまでの歩みがあるからこそできるものです。この環境に感謝して、謙虚にまるとデジタル化して発信していきます。



これから大田堯元学長の資料を収蔵する部屋



社会に貢献する言語研究を目指して

国文学科 教授
早野 慎吾



筑波大学システム情報系の委託研究員として1年間、感情表現ができる人型AIロボットに関する研究を行ってきました。AIという情報工学の分野と思われがちですが、使われる情報は文科系を含む他分野の情報が多いのです。先日、情報学研究所の北本朝展さんとAIを使った日本文化の解析について話をしました。情報学研究所では、国文学研究資料館と共同で約30万点の古典籍をデジタル化して、さらにAIに深層学習させてくずし字認識手法KuroNetを開発しているそうです。日本文化をAIとデータから読み解くのです。

私は、言語学や社会心理学の成果を利用して、人の心が理解できて、自ら感情表現ができる人型AIロボットの開発を行っています(現在、3つの科学研究費研究の代表者もしくは分担者として研究を進めています)。最も優れた感情表現として評価されている人形浄瑠璃から得られたビッグデータをAIに深層学習させています。そして、ノーベル賞を受賞した行動経済学に基づくNudge theoryやprospect theoryを活用して解析しています。Nudge theoryは、個人や集団に強制を伴わずに望ましい行動を取らせる理論で、prospect theoryは、確率に対する人の反応が線形でないことを示す理論です。どちらもコミュニケーション技術に応用が可能です。

した。本研究の最終目標は、高齢者や医療現場を支えるジャパンスタイルのホームロボット開発です。

研究メンバーには本学元非常勤講師の井伊菜穂子さん(琉球大学准教授)や卒業生の江澤実紀さん(東京外大大学院博士後期課程)も加わっています(図1)。江澤さんと井伊さんは、来年度の国際会議発表を目指して研究を進めています。私は、今年度、Natureブランドの国際誌に2編投稿予定です。以前発表した私の研究ですが、昨年度、国際誌8編に引用されました。院生時代、恩師から、論文は英語で書かないと日本言語学の国際的地位は上がらないと言われてきました。当時は、国内で評価されれば、それでいいと思っていましたが、最近になって恩師のこぼの意味がわかりかけてきました。

図1に写っていないメンバーを含めて、本研究には、全国から12名の研究者が参加しています。まだ意匠登録前なので掲載できるのは頭部の画像のみですが(図2)、今年(2025年)8月には、研究記者会見を都内の市ヶ谷で実施する予定です。そのときは、ロボットの全身に外装が施され、衣装が着せられます。研究はそれ自体で意味があるとも言えるのですが、私は、できるだけ社会に貢献できる研究を目指しています。

末筆ながら、学外研究の機会を与えてくださった方々に感謝申し上げます。



図1 日米共同制作英語劇『AKUTAGAWA』上演会場にて、研究メンバーとトム・リーさん



図2 人形浄瑠璃の所作と人の感情を深層学習したAI人型ロボットの頭部

男女共同参画行政とジェンダー／ セクシュアリティ、民族・人種、そして教育・学習



地域社会学科 准教授
富永 貴公

研究に専念できる時間は、ふりかえれば大学生・大学院生ぶりであった。まずはこのような1年間を得られたことにつき、学科同僚の皆様をはじめとして、学内の皆様に感謝申しあげたい。この1年間の学外研究という経験は、わたしのこれまでの学究生活をふりかえり、さらに、それらを次に進めるような多くの問いを得る機会となった。

まず、男女共同参画行政に関わって、それは一体、何のどのような問題を対象とし、何をすべき行政部局であるのかといった問いが常にあった。学外研究中に出会えた男女共同参画行政部局で働く職員の方々は一様に、男女平等と、そこにおけるセクシュアリティ平等、さらには「困難な問題を抱える女性への支援に関する法律」を受けた福祉分野を結び、一般行政と教育行政のみならず、福祉行政との横のつながりを考えながら職務を遂行する、という難しい役割を負わされている状況があった。このような状況は、男女共同参画行政に関わるナショナルな指針を求めるが、それまでその役割を担ってきたはずの国立女性教育会館(写真1)が、2025年3月をもってその研修・宿泊機能を物理的に失う。このことをどのように考えれば良いだろうか。

次に、このような国立女性教育会館をめぐる状況変化に関わって、ジェンダー／セクシュアリティ平

等を求める動きのなかで、ジェンダー／セクシュアリティ研究を含むフェミニズムと、それら内外における葛藤がある。それは“女性”であるがゆえに経験されてきた困難と、“女性”ではないと見なされてしまうがゆえに経験されてきた困難をめぐる葛藤である。このような葛藤が、“男性”であるがゆえに経験されてきた困難や、“男性”ではないと見なされてしまう困難とどのように重なり、異なるのかは十分に議論されていない。このことをどのように考えれば良いだろうか。

そして最後に、このような「性別」に関わる議論のなかでは常に人種や民族がないことのようにされてしまう状況がある。例えば、日本人が多く移住したハワイにおいて、どのようにジェンダー／セクシュアリティ秩序があるのか、移住民の文化がどのように動員されたのかについて、ハワイ・プランテーション・ヴィレッジ(写真2)の語り部は多くを教えてくれた。国際化する日本社会におけるジェンダー／セクシュアリティをめぐる、わたしたちは何をどのように問題とできるだろうか。

学外研究の1年のあいだにも多くが変化した。その変化のなかでわたしたちの生と性がどのようにあり得るか、教育・学習という対話のもとで考えていきたい。

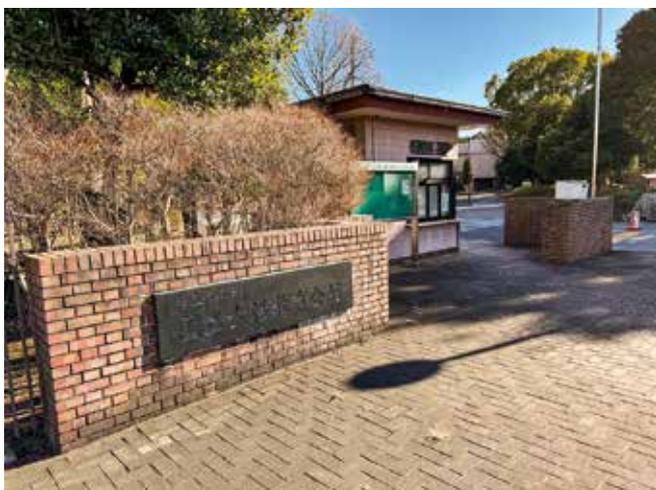


写真1 独立行政法人・国立女性教育会館



写真2 Hawaii's Plantation Village

昨年度（令和6年）の就職状況を振り返る



キャリア支援センター長 山本 芳美

堅調な就職状況

都留文科大学の就職状況についてお伝えします。令和7年3月に本学の学部を卒業した782名の就職率（就職者/就職希望者）は98.3%で、前年度と変わらない高い就職率となりました。

3年ほど前はCovid-19の影響で「採用手控え」などもありましたが、現在はその状態から一転して若者層の求人数が増加傾向となっています。本学においても就職状況が好調な状態は、若者の就職状況をめぐるとさまざまな報道で伝えられる通りです。令和5年度

にすでに令和4年度より0.9ポイントの伸びを示しており、昨年度も維持できたのは喜ばしい限りです。

なお、「就職しない」と答えた卒業生95名のほぼ半数の58名は進学を選び、大学院や留学、他大学編入、専門学校などで学び続ける道を選びました。自宅での受験準備などで教員や公務員採用試験合格を引き続き目指す卒業生も12名おり、文大生ならではの粘り強さをみせています。

公務員採用と一般企業の就職にも大きな伸び

教員・公務員・一般企業の業種ごとにみまると、教員採用は218名となりました。ちなみに、昨年度は181名ですから大幅な伸びを示しています。うち小学校教員は141名の採用です。中学校教員が30名、高校教員が16名、中高共通校には7名、特別支援には6名が採用されています。全国で見ると42教育委員会に採用されています。私立学校へも18名が採用されて教鞭をとることになりました。

公務員は102名の採用を達成しました。うち国家公務員が20名となります。また、一般企業への就職は355名で、県外出身者で山梨県内企業に就職したのは9名、公務員は2名、教員は13名です。

本学に対し、地元企業などから「優秀な人材に都留市周辺、ないし山梨県内に残って活躍してほしい」という要望が高まっています。すでに一定数の県外出身者が就職するようになり、そうした期待に応えられる大学になっています。

表1 令和7年3月卒業生（前期卒を含む）の就職関係データ

	6年度
卒業者数 A	782
就職希望者数 B	687
就職決定者数 C	675
大学院等進学者数 D	47
就職率 $C/B \times 100$	98.3
進路決定率 $(C + D) / A \times 100$	92.3

就職決定者内訳

企業	355
教員	218
公務員	102

今後の展望

教員養成の分野で全国クラスの実績を持つ本学ですが、教員・公務員採用と一般企業への就職が約半数を占めている現状があります。企業就職をした卒業生が、数年後にステップアップを目指して転職する傾向

も見られます。

こうした状況を踏まえて、本学キャリア支援センターでは、教員、公務員、企業の各分野の相談員を配置し、3、4年生の相談にきめ細かくあたるようにしています。

今年度からは、2年生のキャリア教育として、これまでの教員志望者向けだけでなく、公務員志望者向け、企業志望者向け就職ガイダンスも実施するようにしています。また、共通専門科目の「キャリア形成」を刷新し、対象は全学年ですが、より低学年からの啓発を意識した内容にしました。また、1日8時間、5日間の40時間以上の実習、実習先からの評定書、事前事後指導等を総合して単位認定する「インターシップ」もあります。学生たちは自らが積極的にインターシップの機会を探し、行政の現場や企業風土により気軽に触れるようになっていきます。

富士山と富士五湖を擁する山梨県東部に位置する公立大学ならではのゆったりとした環境は、本学の魅力のひとつです。しかし、自らが何を人生の目標として求め、どのような環境でいかなる働き方をしたいのか、学生たちにできるだけ早期に自らのキャリアの方向を見定め、大学内外で学びを進めていく意識づけをして

いく必要が高まっています。

キャリア支援センターは、大学隣接地域に開かれたインバウンド向けサービスの可能性も見据えつつ、学生自身が今後いかに生きていくのか、その方向性を定めていくことを応援しています。企業との面談、情報交換の機会を増やし、企業ガイダンスをオンラインを含めて積極的に開催しています。また、ワークショップ、OB・OGとの面談などの各種催しを年間通じて実施しています。昨年からは、15分の個別相談が確保できる「キャリアの窓口」、教務相談室と連携した「今とこれから座談会」を開催しています。

「何から手につけてよいかわからない」という学生の皆さんは、ぜひ早めに積極的にセンターに来て、さまざまな機会を活用してください。

表2 令和7年3月卒業者（前期卒を含む）の就職先別人数

A 教員	小学校	141	公立学校都道府県市別採用数（臨採含む）	北海道・札幌市	2	山梨県	39
	中学校	30		青森県	1	長野県	10
	中高共通	7		岩手県	7	岐阜県	6
	高等学校	16		宮城県・仙台市	4	静岡県	13
	特別支援学校	6		山形県	5	浜松市	1
	私立学校	18		福島県	7	愛知県	1
	合計	218		茨城県	10	三重県	1
B 公務員	国家公務員	20		栃木県	6	京都府	1
	地方公務員	82		群馬県	5	京都市	1
	合計	102		埼玉県	5	兵庫県	3
C 民間企業	建設業	11		さいたま市	1	和歌山県	2
	製造業	41		千葉県・千葉市	4	岡山県・岡山市	4
	情報通信業	46		東京都	14	広島県・広島市	1
	運輸・郵便業	20		神奈川県	5	山口県	2
	卸小売業	61		横浜市	4	徳島県	5
	金融保険業	32		相模原市	2	香川県	2
	不動産業	11		新潟県	4	愛媛県	4
	サービス業	92		新潟市	1	福岡県	2
	教育・学習支援業	22		富山県	3	長崎県	3
	医療・福祉業	10		石川県	3	宮崎県	2
	その他団体	9		福井県	3	鹿児島県	1
	合計	355			合計	200	

2024 年度学生による 授業アンケートの結果について



FD 委員会 委員長 日向 良和

FD 委員会委員長を務めさせていただいております日向です。例年の報告となりますが、2024 年度に実施いたしました学生による授業アンケートの結果について報告いたします。

学生による授業アンケートについて

「学生による授業についての学生アンケート」は、大学の自己点検・自己評価活動の一環として、本学における授業内容の改善・向上を目的とし、前期末および後期末授業時間内に、受講生が受講している講義に対して質問項目に回答するという形式で実施している

アンケートです。これらのアンケート結果を元に大学教員自身が講義の内容や講義方法を自己点検し、次年度以降の教育の向上につなげていくことを目的としています。

2024 年度授業アンケート結果について

2024 年度授業アンケートの回答率は専任教員担当科目が 65.2%、非常勤講師担当科目が 76.4% で全体としては 71.0% となっています。2023 年度と比較して全体の回答率はほぼ横ばいとなっていますが、専任教員の担当科目での回答率が 2 ポイント以上減となっており、回答率の向上を図ることはなりません。アンケート回答率の低下は教員の授業の自己点検のための基礎的なフィードバック情報の減少を示すため、2025 年度も前年度にひきつづき回答率の向上のための取り組みが必要です。2025 年度に向けてアンケート対象科目の重点化や回答方法の効率化などを検討しています。

2024 年度前期、後期のアンケート結果のスコア（各項目 1～5 点で回答、5 がとてもそう思う、1 は全くそうは思わない）を見ると、学部、大学院共に前期、後期共に授業の内容（シラバスに沿っていて学生の事前の期待に応えるものであったか）、講義方法（理解度に沿ったものか、わかりやすかったかという受講してみた感想や、双方向の学びがおこなわれていたかなど）、難易度の授業全体の学生からの評価は平均点が 4 点（ややそう思う）を越えており、全体として学生の講義に対する満足度は高いと考えられます。また、仲間との協働による探求があったかを問う設問に対して、国

文学科、地域社会学科、比較文化学科で平均スコアが 4 未満となっていますが、各学科の授業方法で個人学習を基本とする科目もあるためと考えられます。

一方で、学習時間を問っている設問のスコアは全体的に低く、一見学則に定められた学習時間が確保されていないように見えます。こちらについては、4 年間の大学生生活期間全体を通じての思考や学習を考慮し、各科目受講時での学習を測った物と考えることができますので、スコアが低いことが学習時間の不足を意味していません。この設問については再設計を検討しています。またゼミナールや大学院のスコアや学部の一部科目は受講人数が少なく、一人の回答スコアが全体の平均点に大きな影響を与えるというアンケート設計上の問題が指摘されています。後期のアンケートでは、自由記述欄について学内でさまざまな意見が出されたため、新しいアンケートを検討するために一時的に設問を中止いたしました。2025 年度に向けてアンケートの実施方法や目的の再検討をおこなっております。

これらの結果については、各講義担当者にフィードバックされ、検討した改善項目等について大学へ報告されています。また大学報への掲載や大学ホームページで公開することで、本学の教育活動の状況を学外

へ発信しています。それは都留文科大学で学ぶことを「選択」する時の大きな参考資料となると期待しています。

授業評価アンケートについては、2025年度実施から実施主体がFD委員会から変更となる予定です。ま

たFD委員会ではFD活動の主体を大学全体から、より具体的、効果的なFD活動が期待できる学科やセンター単位でのFD活動へ2025年度より移行しました。これからも活発なFD活動を展開していきます。

2024年度前期学科別スコア平均

	全 体	学 校 教 育	国 文	英 文	地 域 社 会	比 較 文 化	国 際 教 育	国 文 学 専 攻	社 会 学 地 域 社 会 研 究 専 攻	文 学 専 攻	英 語 専 攻	米 攻 米	比 較 文 化 専 攻	臨 床 学 専 攻
この授業について、過当たりの授業外での平均学習時間はどのくらいですか。	2.58	2.53	2.51	2.61	2.49	2.76	2.74	-	3.92	3.79	3.43	3.00		
授業の内容は、シラバスに書かれた目標と内容に沿っていましたか。	4.58	4.54	4.60	4.66	4.51	4.60	4.62	-	4.31	4.86	4.71	4.50		
授業の内容は、わかりやすく、興味深いものでしたか。	4.49	4.49	4.52	4.59	4.34	4.50	4.52	-	4.31	5.00	4.71	4.64		
授業は、受講者の反応や理解度に応じたものでしたか。	4.41	4.44	4.42	4.52	4.27	4.40	4.44	-	4.54	4.93	4.57	4.57		
受講者の学習意欲や授業参加を促すための工夫がされていて、双方向の学びが実現されていましたか。	4.33	4.37	4.31	4.49	4.19	4.30	4.36	-	4.69	4.93	4.50	4.50		
授業のレベル（難易度）は適切でしたか。	4.40	4.42	4.43	4.48	4.24	4.40	4.45	-	3.92	4.79	4.71	4.79		
あなたは、この授業で理解できなかった点について、どのように対処しましたか。														
この授業を履修したことで、この分野の学びについて、興味・関心・意欲をもつことができましたか。	4.37	4.40	4.37	4.47	4.24	4.37	4.45	-	4.46	4.93	4.57	4.64		
あなたは、この授業で、発見した課題を仲間と共に協働的に探究し、解決する過程を楽しむことができましたか。	4.05	4.26	3.82	4.26	3.90	3.87	4.26	-	4.31	4.71	4.50	4.50		
回答数	13,888	3,420	2,778	1,904	2,509	2,088	767	-	13	14	14	14		

2024年度後期学科別スコア平均

	全 体	学 校 教 育	国 文	英 文	地 域 社 会	比 較 文 化	国 際 教 育	国 文 学 専 攻	社 会 学 地 域 社 会 研 究 専 攻	文 学 専 攻	英 語 専 攻	米 攻 米	比 較 文 化 専 攻	臨 床 学 専 攻
この授業について、過当たりの授業外での平均学習時間はどのくらいですか。	2.62	2.53	2.74	2.64	2.51	2.68	2.85	4.25	3.29	4.05	2.50	2.00		
授業の内容は、シラバスに書かれた目標と内容に沿っていましたか。	4.64	4.65	4.65	4.68	4.59	4.60	4.61	4.13	4.86	4.58	4.80	5.00		
授業の内容は、わかりやすく、興味深いものでしたか。	4.56	4.58	4.58	4.60	4.52	4.47	4.52	4.13	4.71	4.68	4.67	5.00		
授業は、受講者の反応や理解度に応じたものでしたか。	4.48	4.53	4.48	4.55	4.43	4.37	4.49	4.00	4.71	4.84	4.67	5.00		
受講者の学習意欲や授業参加を促すための工夫がされていて、双方向の学びが実現されていましたか。	4.41	4.49	4.38	4.50	4.36	4.28	4.42	4.00	4.71	4.74	4.67	5.00		
授業のレベル（難易度）は適切でしたか。	4.47	4.54	4.46	4.51	4.43	4.38	4.45	4.13	4.71	4.74	4.67	5.00		
あなたは、この授業で理解できなかった点について、どのように対処しましたか。														
この授業を履修したことで、この分野の学びについて、興味・関心・意欲をもつことができましたか。	4.45	4.50	4.42	4.52	4.42	4.36	4.44	4.00	4.71	4.89	4.83	5.00		
あなたは、この授業で、発見した課題を仲間と共に協働的に探究し、解決する過程を楽しむことができましたか。	4.14	4.38	3.92	4.35	4.03	3.86	4.32	3.75	4.14	4.63	4.83	3.00		
回答数	9,926	2,745	1,831	1,553	1,800	1,400	391	8	7	19	6	1		

入試状況報告

2025 年度入試を振り返って



入学センター長 両角 政彦

2025年度入試では志願者数が合計4,795名となり、過去10年間で最も少なかった2023年度入試(3,403名)から2年連続で増加し、2017年度入試(5,720名)に次ぐ志願者数となりました。前年度比で1.24倍に上昇し、より多くの受験生から出願をいただくことができ、喜ばしい結果でした。ただ入試形態ごとに見ると、異なる面もありました。

総合型選抜では志願者が前年度比で11名減となり、学校推薦型選抜(一般およびIB)でも30名減でした。一方、共通テスト利用学校推薦型選抜では8名増でした。これら三つの入試は受験生にとって第一志望であると考えられ、学科ごとに志願者の変動に差がある中で全体では減少する結果となりました。

一般選抜の前期日程でも学科ごとに志願者数の変動に差があったものの、全体では前年度比20名増となりました。中期日程では6学科全てで志願者が増加し、前年度の2,387名から3,343名へと956名の

大幅増を得ることができました。一般選抜ではいずれも2年連続で志願者が増加し望ましい結果でした。その一方で、合格者数に占める入学者数の割合は前期日程で49%、中期日程で51%となり、前年度から前期日程で2%、中期日程で5%いずれも低下し、気がかりな結果も表れています。

入試全体では730名の定員に対して832名の入学者(留学生を含む)を受け入れることができました。以上の結果を詳細に分析して今後対応していくこととなります。

本学では、「卒論のツルブン」をスローガンとして学生の修学に力を入れてきました。今後も社会で活躍する卒業生を送り出すために、入口となる入学試験でも多くの志願者・入学者の確保に力を注ぐこととなります。皆様におかれましては各方面でご尽力をいただき誠にありがとうございました。引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。

総合型選抜			
		志願者	合格者
文 学 部	英文学科	76	43
	学校教育学科	25	12
教 養 学 部	地域社会学科	43	13
	国際教育学科	9	5
計		153	73

学校推薦型選抜			
		志願者	合格者
文 学 部	国文学科	166	59
	英文学科	70	42
教 養 学 部	学校教育学科	135	72
	学校教育学科(共通テスト利用)	54	19
	地域社会学科	129	66
	地域社会学科(共通テスト利用)	38	13
	比較文化学科	64	51
	比較文化学科(共通テスト利用)	34	21
	国際教育学科(IB推薦含む)	33	25
	国際教育学科(共通テスト利用)	8	2
計		731	370

一般 前期日程			
		志願者	合格者
文 学 部	国文学科	127	40
	英文学科	127	52
教 養 学 部	学校教育学科	131	47
	地域社会学科	98	53
	比較文化学科	51	31
	国際教育学科	34	17
計		568	240

一般 中期日程			
		志願者	合格者
文 学 部	国文学科	733	113
	英文学科	415	74
教 養 学 部	学校教育学科	906	137
	地域社会学科	609	92
	比較文化学科	569	93
	国際教育学科	111	11
計		3343	520



令和6年度 都留文科大学卒業証書 学位記授与式



令和7年3月22日(土)、午前11時より都の杜うぐいすホールにて、令和6年度卒業証書学位記授与式を開催いたしました。当日は、3月のうらかな日差しが心地よく感じられるなか779名(学部、大学院を含む)がそれぞれの道へ旅立ちました。

加藤学長は祝辞で、「新しい挑戦の連続であった大学生活の経験、そして、大学の学問を通して培った知性と人間性はこれからの原動力となるはずです。明日から歩むそれぞれの場で、文大生としての自信と誇りを胸に、誰かのために、誰かの幸せのために、挑戦を続けてください。皆さんの活躍を心から願い期待しています。」と述べられました。

卒業生代表の服部隼さん(英文学科)は卒業生のこ

とばとして、「都留文科大学での生活は、人との関わりやその大切さ、かけがえのなさを実感するという誇れる学びを得られたものと言えます。大学で培った自分の成長と学びへの貪欲な姿勢とコミュニケーションの大切さは、今後私たちがどのような場所でもどのように生きようと不可欠なものとして私たちの根幹を担うことになるでしょう。」と力強く語られました。

合唱団と吹奏楽部の学生による学生歌「花のかけ」、愛唱歌「都留は universe」の演奏で式は終了しましたが、最後まで集合写真を撮り合うなど、別れを惜しむ卒業生の姿が見られました。

令和6年度学生表彰について

学生表彰は、学業成績や課外活動において特に顕著な成績を挙げた学生・団体、社会活動において社会的に高い評価を受けた学生・団体に対し、その栄誉をたたえ表彰する制度です。令和6年度においては、以下のとおり3 団体が表彰されました。



種 別	被表彰者	成績等(概要)
課外活動(団体)	剣道部	「第73回関東甲信越大学体育大会 剣道競技」において、女子団体3位の成績を修め、第71回大会から3年連続の入賞。
課外活動(団体)	合唱団	「第77回全日本合唱コンクール全国大会 大学職場一般部門 大学ユースの部」において、金賞および文部科学大臣賞を受賞。
課外活動(団体)	女子バレーボール部	「令和6年度天皇杯・皇后杯全日本バレーボール選手権大会」において山梨県予選を優勝し、代表として関東ブロックラウンドに出場。 「第71回秩父宮妃賜杯全日本バレーボール大学女子選手権大会」においてベスト32位の成績。

名誉教授の称号授与

次の2名の教員に対し、これまでの研究活動並びに学内活動などの功績を称え、名誉教授の称号を授与いたしました。



筒井 潤子 教授
学校教育学科

20年間にわたり本学の教員としてつとめられました。臨床心理学と臨床教育学の領域において長く活躍された中、SAT活動・事業では、特別な支援を必要とする児童生徒に対して学生を派遣するSAT-Cの設立にもご尽力され、都留市の小学校現場においても大きく貢献されました。また、人権委員長や介護等体験委員長なども歴任され、教育研究のみならず本学の運営に多大な貢献をされました。



伊香 俊哉 教授
比較文化学科

23年間にわたり本学の教員としてつとめられました。この間、学科長、大学院文学研究科入試委員長、比較文化専攻主任などの要職を歴任し、学科の特色である「スタディツアー」では、学生の戦争や平和に対する認識を深めることに力を入れられました。ゼミの評判に留まらず、先生の下で学びたいとオープンキャンパスで受験生が多数来訪するなど、学生への指導には定評があり、また、研究姿勢は教員の模範でありました。

本学発展のため多大な貢献を賜り、誠に有難うございました。

交換留学生学長訪問

都留文科大学では、セント・ノーバート大学（アメリカ）、ゲント大学（ベルギー）、上海外国語大学（中国）、西北大学（中国）、韓国外国語大学校（韓国）からそれぞれ2名ずつ、ダーラナ大学（フィンランド）、ナポリ東洋大学（イタリア）、誠信女子大学校（韓国）からそれぞれ1名ずつ、6か国8大学から計13名の交換留学生を新たに迎え、4月16日（水）に学長を訪問しました。

留学生たちは学長を前に緊張しながらも、日本語で自己紹介をしました。

学長からは、「ツルブンは今年創立70周年を迎え、この70周年という特別な年にこのツルブンのメンバーになった皆さんには、70周年のイベントも貴重な体験になると思います。そして、留学生の皆さんがここで元気に活動してくれることは、大学にとって、また都留というまちのコミュニティにとって大きな活

力になります。皆さんがこのツルブンで、この都留のまちで、どのような風を起こしてくれるのか今からとても楽しみにしています。ぜひこのツルブンのキャンパス、それから都留というまち、地域全体をフィールドとして実り多き挑戦に満ちた留学生活を送ってください。」と応援のメッセージをいただきました。



第56回つる子どもまつり開催



5月25日（日）に、「第56回つる子どもまつり」を開催しました。

つる子どもまつりは、今年で56回目を迎えた子どものためのまつりで、歴史ある地域活動の一つです。今年の目標は、「みんながつながりあえる子どもまつりにしよう」でした。少子化や家庭用ゲーム機の普及

により子どもたちがどこかに集まりあそぶという機会がほとんどないという現状から、この子どもまつりの「地域の子どもが集まる」という特性を生かし、「初めて会った子どもたちが手を取り合って様々な企画で盛り上がるようにしよう」という願いから、このような目標を設定しました。この目標を達成するため実行委員会では半年間、昨年以上に広報活動に力をいれたり、参加される団体の皆様に初めて会う子どもたちが協力し合えるような企画をしてもらったりといった活動を行ってまいりました。その結果、約250人の子どもたちが遊びに来てくれ、大盛り上がりを見せました。

来年も5月に開催できるよう、これからも活動を続けていきたいと思っています。

第56回つる子どもまつり実行委員長 瀬田 祐生



「ボランティアフェス」を開催しました。

「ボランティアフェス」を4月10日(木)にTHMCで開催しました。

都留市社会福祉協議会と連携し都留市内のボランティア団体や、以前から大学に活動紹介があったボランティア団体などをお招きして団体の紹介や活動内容の説明を行いました。今回はボランティア団体17団体、学生は114名の参加者数となりました。

最初に学校教育学科の堤英俊教授からボランティア事業の説明

を行い、社会福祉協議会から協議会の紹介・活動内容、ボランティア保険の説明を行いました。その後複数の教室にある各団体のブースのうち、学生は興味があるボランティアのブースを訪問し、各団体が準備したポップや動画等を見て説明を受けていました。2時間程度でしたが、学生はお目当てのブースや初めて知るボランティア団体のブースに訪問し、積極的に質問をする姿や、体験を行っている様子



が見られました。

今後も地域のボランティアニーズの紹介や募集のお知らせ対応や、短時間に体験できる活動などを計画していきます。



「キャリアデザインワーク」を開催しました。

5月10日(土)に本学学校教育学科 佐藤比呂二特任教授を主体として、「ようこそ!キャリアデザインワークへ!」をテーマに第1回目のワークを開催しました。新たな参加者も迎え、まずは名札づくりや「自己紹介じゃんけん列車」で交流を深めました。休憩時間には、参加者の方が扮した謎のクイズ仮面が現れ、恒例のクイズ大会で盛り上がりました。メインの活動では、一人一人、工夫を凝らしたこいのぼりを作り、そこに5月の目標を書き込みました。身近なものから将来の夢まで、みんな気持ちを込めて書いている姿が印象的でした。

6月以降も校内で大学生や地域の方々とともに「働くこと」についての講座やコミュニケーションワーク、市内の協力事業所に分散して職場体験を行う予定です。今後の日程や活動の詳細は大学HPからもご覧いただけます。

市民公開講座

いきものかんさつはおもしろい



5月25日(日)に「つるフィールド・ミュージアム」において地域交流研究センター北垣憲仁教授による小学生と保護者を対象とした「いきものかんさつはおもしろい」を開催しました。

参加者6名は自己紹介をした後、北垣教授から本日の観察予定とフィールドに出る際の諸注意について説明を受けました。その後薄曇りの中でしたが、一人ひとりルー

「クロスボーダー・プロジェクト」を開催しました。

5月10日(土)に「クロスボーダー・プロジェクト」(通称“クロボ”)を開催しました。第1回となる今回は、参加者40名、学生ボランティア41名となり、幼児から社会人まで幅広い年齢層の方にご参加いただきました。

午前中は都留文科大学体育館で30分間ダンスを楽しみ、残りの60分はフロアホッケー、フロアボール、ドッチビー(ソフトフリスビー)の中から興味があるものを選択してグループに分かれて運動を楽しみました。お昼のどんらんの後は大学美術棟で「絵に表そう」をテーマに、各々が模型の野菜や飛行機など身近で気になるものを題材にしてクレヨンや色鉛筆等を使って画用紙に自由に表現するアート活動を行いました。

今年度のクロボは6月、7月、10月、11月、12月に実施する予定です。今後の日程や活動の詳細は大学HPからもご覧いただけます。



令和7年度「学級づくりの向上をめざす実践講座」開催

5月24日(土)に5号館5103教室において「学級づくりの向上をめざす実践講座」を開催しました。これは現職教員および教職を志す学生、教職に興味がある学生を対象に開催している講座で、山梨県内で学級づくりに意図的に取り組んできた教員を講師に招き、「学級づくり」を学び合う学習会です。今年度で14年目を迎えています。

初回は武蔵野大学の渡辺幸之助特任教授による、「学級づくりの分岐点～組織する力を子どもと共に伸ばすには」と題した講義が開催され、20人を超える現職教員及び教職を志す学生が参加し、渡辺特任教授の講義に耳を傾け、熱心に学ぶ姿が見られました。

令和7年度から初の試みとして、対面での参加が困難な参加希望者のためZoomによる講義視聴も始め、今回は21名の参加がありました。また、講義前には【学級づくり相談会】を開催し、ベテランの教員経験者が2名体制で希望者の相談に乗ります。

今年度も引き続き、月に1回講座を開催する予定です。今後の開催予定につきましては地域交流研究センターまでお問い合わせください。



ペをもってフィールド探索に出ました。

最初に「つるフィールド・ミュージアム」の水鉢に生息するメダカの卵や水草、アーモンドの果実を観察し、野外に出て先生の説明を受けながらオドリコソウ、マタタビの葉、クロモジの木などを直接手に取り、観察して植物について学びました。「つるフィールド・ミュージアム」に戻ってからは、採取してきたシロツメクサ

で花冠づくりも体験しました。

参加者からは「見たこともない花や草をしらべることができてうれしかった」や、「みんなで歩いてかんさつができた」、「花のみつがあまかった」などの感想がありました。





春季オープンキャンパス実施報告



5月17日(土)に春季オープンキャンパスを実施いたしました。当日は大雨にも関わらず、多くの方にご来場頂き誠にありがとうございました。対面でのご参加を希望されていた方も、当日オンラインに切り替えるなど、ご不便をおかけしたと存じます。是非夏のオープンキャンパスの際にはご来場いただけます事を心よりお待ちしております。

当日対面にてご参加いただいた方は、保護者の方含めて707名、オンラインでのご参加が延べ人数で212名となりましたので、合計900名前後の方々にご参加いただけたこととなります。内訳としましては、高校3年生が8割弱、2年生が2割となり、1年生の参加者もいらっしゃいました。私共も、学内の設備や学生の様子、特色あるカリキュラムなど、お伝えしたい部分が多々ありましたが天候の関係で自由に回っていただくことができなかつたかもしれません。その中でも、学生による英語劇や、今回初めて行った天文台見学会など多くのご参加を頂くことができました。本学の自然科学棟にある天文台には大型望遠鏡を

設置しており、年に数回ですが市民の方と共に星空観察会も行っております。近くでみる機会の少ない天文台内部ですので、楽しんで頂けたのであれば幸いです。

事後アンケートでは、「キャンパス内の写真や説明会で使ったスライドをもう一度みたい」「在校生の意見や、専任教員についてもっと詳しく知りたい」「当日のスケジュールを事前に詳しく知りたい」といったご意見を頂きました。夏のオープンキャンパス等に向けてご要望に添えるよう尽力してまいります。また、秋には大学で行っている通常授業を公開し参加してもらえるイベントも検討してまいります。今後、大学で開催する取り組みにご期待頂けますと大変ありがたく存じます。

最後になりますが、春季オープンキャンパスの準備・運営に快くご尽力いただきました、教職員・学生スタッフ・広報委員会の皆様、誠にありがとうございました。

広報委員長 吉岡 卓



令和7年度人事異動等について

教 員

【採用】(令和7年4月1日付)

脇田 裕 正 (文学部国文学科准教授)
 小田 郁 予 (教養学部学校教育学科准教授)
 小川 輝 光 (教養学部学校教育学科准教授)
 軽部 利 恵 (文学部国文学科講師)
 阿部 真 也 (文学部国文学科講師)
 佐藤 みのり (教養学部学校教育学科講師)
 函子 あまね (教養学部学校教育学科講師)
 中村 仁 (教養学部学校教育学科講師)
 片山 夏 紀 (教養学部比較文化学科講師)
 西尾 理 (教養学部地域社会学科特任教授B)
 筒井 潤 子 (保健センター特任教授B)
 原田 真喜子 (地域交流研究センター特任講師B)

【退職】(令和7年3月31日付)

筒井 潤 子 (教養学部学校教育学科教授)
 加藤 優 (教養学部学校教育学科教授)
 西尾 理 (教養学部地域社会学科教授)
 伊香 俊 哉 (教養学部比較文化学科教授)
 加藤 浩 司 (文学部国文学科教授)
 瓦林 亜希子 (教養学部学校教育学科准教授)
 Karl Johan Nordstrom (教養学部国際教育学科准教授)
 佐藤 隆 (教養学部学校教育学科特任教授B)
 清水 雅 彦 (教養学部学校教育学科特任教授B)
 神山 英 子 (語学教育センター特任准教授B)

【昇任】

武蔵 由 佳 (教養学部学校教育学科教授)
 前島 礼 子 (教養学部国際教育学科准教授)
 鬘 櫛 利 和 (教職支援センター特任教授)

【学外研究】

OLAGBOYEGA Kolawole Waziri (文学部英文学学科教授)
 原 和 久 (教養学部国際教育学科教授)
 岡野 恵 司 (教養学部学校教育学科准教授)
 福島 万 紀 (教養学部地域社会学科准教授)

事務職員

【転任】(転出)

市民部長
 田中正樹 理事(事務局長(兼)総合企画室長)
 福祉保健部 福祉課 課長
 相川 薫 学生支援課 課長
 総務部 財務課 主幹
 三澤 知 貴 経営企画課 主幹(兼)課長補佐
 会計課 主幹
 清水 友美子 教務課 主幹(兼)課長補佐
 総務部 企画課 副主査
 蛭間 将太 経営企画課 副主査
 総務部 企画課 主任
 天野 麻 由 経営企画課 主任

【転任】(転入)

理事(事務局長(兼)総合企画室長)
 小宮 文 彦 福祉保健部長
 学生支援課 課長
 依田 博 江 福祉保健部 福祉課 課長
 経営企画課 主幹(兼)課長補佐
 有賀 ひとみ 教育委員会 生涯学習課 副主幹
 教務課 主幹(兼)課長補佐
 志村 高 男 市民部 地域環境課 主幹(兼)課長補佐
 経営企画課 主査
 藤江 毅 総務部 企画課 主査

【昇任】

経営企画課 入試担当 主査
 石合 愛 経営企画課 入試担当 副主査
 学生支援課 学生担当 主査
 古屋 道 輝 学生支援課 学生担当 副主査

【配置換え等】

総務課 副主査(都留市地域環境課)
 北浦 麻奈美 総務課 庶務人事担当 副主査
 経営企画課 企画広報担当 副主査
 栗賀 暁 総務課 副主査(都留市企画課)
 教務課 教職担当 主任
 飯沼 章 総務課 財務法制担当 主任

【採用】(令和7年4月1日付)

総務課 財務法制担当 副主査 白鳥 雅 人
 総務課 庶務人事担当 主任 渡邊 大 貴
 経営企画課 I R担当 主事 長田 詩 織
 教務課 教務担当 主事 大屋 遼
 学生支援課 学生担当 主事 大房 美 奈
 学生支援課
 保健センター担当 保健師 藤江 浩 美

【退職】(令和7年3月31日付)

総務課 研究支援担当 副主査 渡邊 誠 大
 学生支援課 保健センター担当 主任保健師
 遠山 喜与子



学ぶことと教えること

国文学科 陳 佑真

本学に着任して一年が過ぎました。ここでは漢文学の授業で取り上げた中から、「学」という字についての話題をご紹介します。

まず「学」という字の部首は何でしょうか。漢和辞典では子部にありますが、西暦一〇〇年に中国で完成した最古の字書『説文解字』をひもとくと、「学」の部首はなんと「教」だといえます。「学」の本来の書き方は「斆」で、覆われていることを表す「冂」、発音を示す「臼」を部首に加えて成っているというのです（「教」の旧字体は「教」）。

十九世紀の学者・段玉裁は「学」と「教」との関係『礼記』を引いて説明しました。「教えて然る後困しむを知り、困しむを知りて然る後能く自強するなり。故に曰く、教学相い長ずるなり、と（他人に教えてから苦しむことを知り、苦しんでから懸命に学ぶことを知る。だから、教えることと学ぶことというのは補い合うものなのだ）。自分でわかった気でいても教壇に立つと、本当にこれで正しいのか、と疑問が湧く、というのは我々教育に携わる者には「あるある」ではないでしょうか。

続きです。「兗命に曰く、学は学の半ば、と。其れ此の

謂いなるか（説命という書物に、学は学の半ばだ、とある。まさにこのことだろうか）。「学は学の半ば」とはおかしな記述ですが、上の学字は「おしうる」と読むのだ、と段

玉裁は述べます。「おしうるはまなびの半ば」、他人に教えることの半分は自分の学びだ、というわけです。

唐突ですがここで私は段玉裁と同時代のフンボルトという人を思い浮かべました。彼は、大学は学生に決まった正解を伝授する場ではなく、教員が研究の成果を教育に還元し、学生もそれを鵜呑みにするのではなく常に疑って自主的に研究する場でなければならない、という研究・教育一致の主張をした人です。両者の「学」への認識がどこか共通しているように思われたのです。正解の見えない現代の大学で生きる我々にこそ、「学」とは何なのか、立ち止まって考えることが求められているのかもしれない。



段玉裁『説文解字注』より「学」・「教」。本学所蔵。

ぶんだい堂



現場教師の連帯のための日本学校教育論

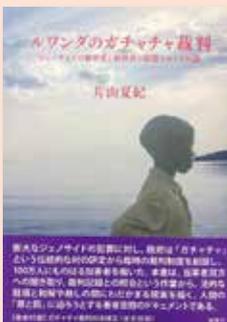
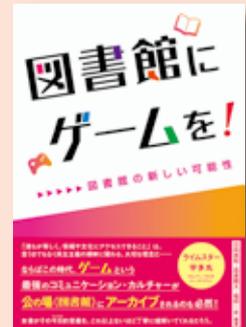
西尾 理 著
2025年2月発行
三恵社

◇西尾 理
地域社会学科 特任教授

図書館にゲームを！ 図書館の新しい可能性

日向良和・高倉暁大・福田一史
編著
2025年5月発行
日外アソシエーツ

◇日向 良和
共通教育 教授



ルワンダのガチャチャ裁判 ジェノサイドの被害者と 加害者の賠償をめぐる対話

片山夏紀 著
2025年3月発行
風響社

◇片山 夏紀
比較文化学科 講師

スロー・ルッキング： よく見るためのレッスン

シャリー・ティシュマン 著
北垣憲仁・新藤浩伸 翻訳
2025年4月発行
東京大学出版会

◇北垣 憲仁
地域交流研究センター 教授

